遼代千人邑会について

井上順恵

目次

序論……106
第一章　遼代千人邑会について……108
第一節　遼代邑会の盛況……108
㈠　石経山雲居寺千人邑会の活躍……109
㈡　千人邑会の例……112
㈢　特殊な性格の邑会……113
第二節　遼代千人邑会とは……116
㈠……116
㈡……117
第二章　邑会の歴史……118
第一節　邑会の始源……118
㈠　義邑・邑会……118
㈡　邑社……119
㈢　法社……120
㈣……120
第二節　遼代以後の邑会……121
結論……123
注……124
参考文献一覧……128

以上

序論

十世紀、燕雲十六州を領有し、初の異民族による中国征服王朝となった契丹民族の遼朝（九一六～一一二五）は、内部に被征服民族として、漢人のみならず渤海人、その他多数の民族を含む民族複合国家であった。かかる国内を統治するために、遼朝が精神的紐帯として採用したのが、世界宗教たる仏教である。[1] 歴代皇帝の保護・崇拝を受けた仏教は、遼代文化の代名詞にも等しい程の盛況ぶりを現出させた。

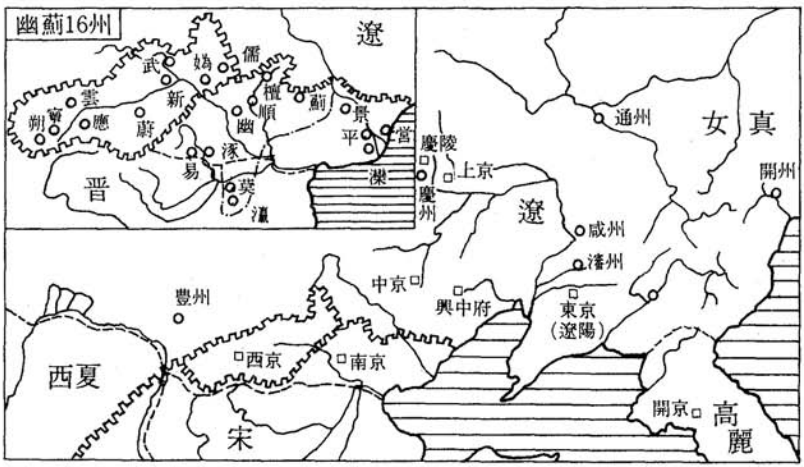
この遼代仏教の特徴が、盛唐の教義仏教を受継ぐものであったのは、遼朝が領有した燕雲十六州が、いわゆる「河北の地」であり、会昌の廃仏（八四五）の時も、旧来仏教が打撃を受けず保存されていたからであり、それが遼代に受継がれ、再び盛況を迎えることになったのである。

遼朝下の仏教文化は、当時遼と対峙していた漢民族の自王朝である宋王朝下の仏教に比べて、一時代遅れた文化であったことは否めない。しかし、遼朝の採った国家仏教による国内統治政策は、遊牧民族であった契丹人に比べ、遙かに高度な文化を持つ被征服民族の漢人を宣撫し人心を収攬して支配する、という面では、意外な程の成功を納めたのである。

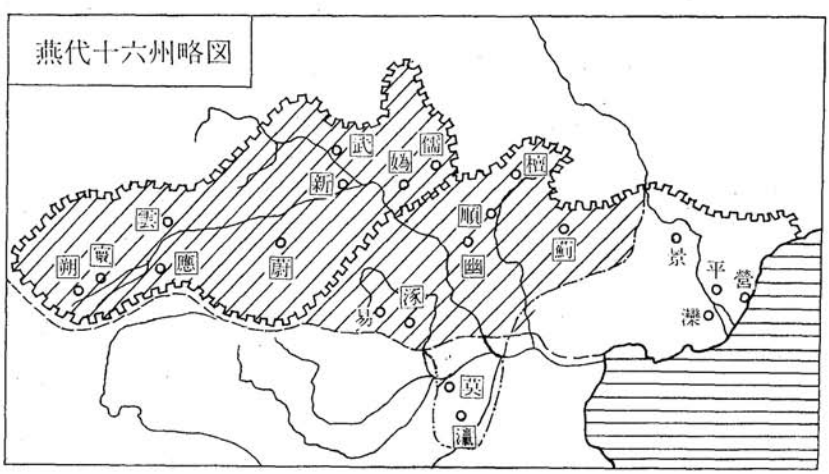
遼代仏教の担い手は、実際には、被征服民族である漢人であった。僧侶にしてもその殆どが漢人であったことはまた、漢人が文化の中心であったことを物語る。遼の南京析津府、即ち燕京（現在の北京）が仏教の中心地であったこともそうである。遼代仏教とはつまり、漢人仏教・中国的仏教に他ならない、と言うことができる。

この中国的仏教である遼代仏教の盛況ぶりを示す一つの例として、邑会、特に遼代に特徴的なものとして千人邑会の活躍を挙げられる。邑会は、遼朝下の被支配層であった漢人の、しかも一般庶民の仏教受容の様子を知る最も重要な史料と言えるであろう。

以下、実際に、この遼代の邑会についての考察をしてゆきたい。尚、その際、遼代のみならず、邑会を発生から振返り、後代にも考察を加え、その歴史の中に遼代邑会を位置づけたい。そしてなぜ契丹治下、邑会が盛んに行われたか、なぜ特に「千人邑会」なる形をとるものが発生し盛んに行われたか、明らかにしてゆきたい。



a．遼帝国の領域略図（『中国征服王朝の研究』上による）



b．燕代十六州の略図（同上）

第一章　遼代千人邑会について

邑会とは、仏教信仰を紐帯として様々な仏教的事業を行うことを目的として結成されるものであり、その始まりは、南北朝時代に見られる。北朝から唐初にかけて造像が盛んに行われた背後には、邑会の絶大な活躍があった。遼代一般社会に浸潤した仏教の盛況にもまた、諸寺の造営・造像・造塔の経済的基盤としての邑会の果した役割の大であったことが知れる。特に邑会が、遼、及び金代において特徴とするのが千人邑会の存在である。この千人邑会の活躍は、最も漢人庶民層の仏教受容の様を知るものとして、特に注目される。

遼代における邑会についての研究は、特に野上俊静氏の研究②があり、その成果に負うところ夥だ大きい。これより遼代の邑会（特に千人邑会）について、主に野上氏の述べるところを参考に、更に考察を深めてみたい。

第一節　遼代邑会の盛況

それでは、実際に遼代邑会の盛んな様子を見てみよう。邑会を知る史料としては、金石文中に残るものしかないのが実情である。野上氏によって渉猟され提示された、金石文中に見られる邑会は次のとおりである。

(a) 仙露寺葬舎利佛牙石匣記〔天祿三年（九四九）『遼文存』巻四〕
(b) 重修范陽白帶山雲居寺碑〔王正撰　応暦十五年（九六五）『同』巻五〕
(c) 重修雲居寺碑記〔智光撰　統和二十三年（一〇〇五）『同』巻四〕
(d) 廣濟寺碑〔宋璋撰　太平五年（一〇二五）『同』巻五〕
(e) 石龜山邃化寺碑〔王寔撰　重熙十一年（一〇四二）『同』巻五〕
(f) 彌陀邑特建起院碑〔咸雍元年（一〇六五）『日下舊聞』巻一七補遺〕
(g) 斬信等造塔記〔大安六年（一〇九〇）『遼文存』巻六〕
(h) 京西戒壇寺陀羅尼幢並記〔太康三年（一〇七七）『金石粹篇』巻一五三〕
(i) 易州興國寺太子誕聖邑碑〔方偁撰　壽昌四年（一〇九八）『遼文存』巻五〕
(j) 金山演教院千人邑記〔韓溫敎撰　乾統三年（一一〇三）『同』巻四〕

(k)　永樂村感應舍利石塔記〔志才撰　天慶十年（一一二〇）『同』巻六〕

他に塚本善隆氏により示される邑会

(l)　大遼涿州雲居寺供塔燈邑記〔行鮮撰　乾統十年（一一一〇）『同』巻四〕

これらは金石文中邑会の存在を認め得るほぼ主なものと言えるであろう。尚、これら記録に残る邑会の存在の裏には、記録に残らなかったその他多くの邑会の存在が想像されることである。

(一)　石経山雲居寺千人邑会の活躍

まず、遼代邑会の活躍ぶりを示すのに最も典型的なものとして取上げるのが、有名な石経山雲居寺所有の千人邑会である。

涿州石経山雲居寺における大蔵経石刻事業の再会が、遼代仏教二大事業の一つに数えられるこの時代の、仏教の盛況を伝える最たるものであることは言うまでもない。

房山石経の刻造事業は、隋代、僧静琬によって始められ、唐末五代の乱世で一時中断していたのが、遼代になり再び続刻が開始されたのである。それに先立つものとしてまず、雲居寺寺塔重修が大規模に遂行され、この契丹治下の雲居寺の活況は実に著しいものがあった。今に残る遼代大蔵経石刻の大事業は、主に聖宗・興宗・道宗の三代の援助によって進められた。その後も通利大師③が民間の浄財を集め続刻を行った。この事業は、帝室の絶大な援助と民間有志の努力によって行いえたと言えるのだが、雲居寺重修事業に現われる千人邑会が、その盛況を支える経営の母体として果した役割もまた、多大なものであったと考えられる。

(b)は、碑額に題して「重修雲居寺壹千人邑之碑」とある。ここに我々は千人邑会の存在を知るのである。碑文は千人邑会について次の様に記している。

今之所レ紀、但以二謙諷等一、同德經營、協力唱和、結二一千人之社一、合二一千人之心一。春不レ妨レ耕、秋不レ廢レ穫、立二其信一導二其教一。無二貧富後先、貴賤老少一、施有二定例一、納有二常期一。貯二於庫司一、補二茲寺缺一。維那④之最者、有前涿將天水公旬…

寺主謙諷を中心にして雲居寺で千人邑会が結成された。それは同寺の経済的協力を目的に結成されていた。この邑会の会員に対して寺側は、春秋の耕作収穫の農繁期を除いた閑期を利用して彼らに仏教信仰の指導（法施）を行った。これに対し会員は貧富貴賤に拘らず一定の常期

の納（財施）を行った。寺の庫司にこれを蓄え寺用に用いた。

前涿将天水公、隴西の某などが維那として名があり、この邑会の有力な幹事役となっていたと思われる。しかし、前述の農耕を妨げずとか貧富貴賤なくなどの言葉から、この邑会が、会員を士庶を選ばず近郊の一般庶民在家の人々を多く含み、社会に広く結成されていたものと思われる。

この様な大規模な邑会を結成ならしめたのは、実に社会上下に仏教が深く浸透していた結果である。当時の人々の仏教への熱狂ぶりを同碑文に四月八日の仏誕日の様を挙げて述べている。当日は、各地の信者から維摩経の「香積の食」になぞられる盛大な食物の供養が行われ、山上山下を雑踏せしめ、熱狂した信者の中には指を焚き頭に香を焚き、或は命を捨てて仏に供養する者さえ現われる程であった。これについて塚本氏は、

今この石経山は、五百年に垂んとする石経によって、「会昌之毀」も懼ることはなく仏の説法即ち法宝を現在に伝え、更に万代に伝え得る聖地であるから、この山下雲居寺並びに山上石室附近に於けるこの日の法儀は、一層仏徒の感激を深くし、次第に盛大になり地方の有力な年中行事的な祭りになったものであろう。そして唐代にできた義飯庁を中心に行なわれた参詣者への食物供養は、益々多数の参詣者を誘引したであろうし、またこの善根功徳をつむ事業をめぐって、信者の結社例えば千人邑会と称せられるようなものも、或は地方別に或は職業別に出来ていたかと想像される。

と、仏誕日に対する人々の熱狂もまた千人邑会を生むに至った背景であろうことを述べている。

こうして唐末五代の戦乱で衰退していた雲居寺は、十五年に亘る謙諷の努力により一新された。前燕京侍中蘭陵公趙延寿[5]夫妻ら貴族の財的援助も受けてではあるが、大規模な庫堂・厨房・転輪仏殿・暖庁・講堂・碑楼・東庫・梵網経廊など建物が次々に建築された。これにはその経営母体たる千人邑会の力がいかに大であったか知れるであろう。

ところが、やっと再建なった雲居寺は、その後再び戦禍に巻込まれ損傷を受ける。が、澶淵の盟[6]が成ると遼国内の経済・文化の充実を受けて、雲居寺は再重修されることになる。

(c)　それを示すのが「重修雲居寺碑記」であるが、これには先の応暦重修の際の千人邑会のことを載せるのみである。

皇朝應暦十四載、寺主苾蒭謙諷、完二葺一寺一、結二邑千

人。

しかし、この重修においても、前回千人邑会の結成され発揮された社会一般に広く人々の力を合わせた援助協力団体が存在したのではないかと想像されるのだが、残念ながらそれを証拠づけるものは記載されていない。

この、重修事業における千人邑会の活躍を見る時我々は、その後雲居寺で再開された刻造事業の遂行を可能にしたのが、ただ遼帝室の絶大な保護ということのみならず、この様な民間有志の協力・努力の結果もまた要因であることと確信するのであるし、ここに契丹人・漢人僧侶・仏教徒の三者が一体になって、一つの事業に向う姿を想像する。千人邑会は、遼の仏教王国ぶりを支える社会の末端までも仏教という紐帯で結びつけることに成功した一つの例と言えるのではなかろうか。

(1)　次にここで「大遼涿州雲居寺供塔燈邑記」を挙げておく。この涿州雲居寺と前述の石経山雲居寺が同一のものかどうか疑問がある。が、塚本氏も述べる如く両者は一応、無関係のものではないと考えられる。[7]

これには、「灯邑」「塔邑」なる邑会の存在を記している。

是以燈邑高文用等、與レ衆誓レ志、毎歳上元、各揆二已財一、廣設二燈燭一、環二於塔上一、三夜不レ息、從レ昔至レ今、殆無レ闕焉。而後有レ供二塔邑一、僧義咸等、於二佛誕之辰一、爐香盤食、以供二其所一、花菓並陳、螺梵交響、若緇若素、無レ不二響應一、郁郁紛紛、若レ斯之盛也。

高文用らは（舎利塔を中心に）灯邑を結び、毎年上元の日（一月十五日）には、各々財を捨て三夜に亘り塔上に盛んに灯燭を設けたが、現在に至るまで殆ど行事が欠けることはなかった。その後、塔邑を僧義咸等が組織した。仏誕日には、この塔に香花飯食を供え、螺梵・音楽の法要などが行われ、多数の僧侶が集い、大いに楽しむこと夥しかった。

この塔邑が、石経山雲居寺でも盛んに行われた仏誕日を祝う行事のため組織された、言わば特定の目的のために結成された邑会であることは興味深い（仏誕日祝賀の目的で結成された邑会には、(i)があるが、これについては後で考察する）。これらの邑会について組織の内容は知れないし、千人邑会であったかどうかも同様である。しかし、この舎利塔を中心にした遼代涿州地方の庶民信仰の実態が窺われる。灯邑・塔邑は、庶民の寺院を中心とした信仰・娯楽・交歓の会としての役割を果していた。このことは田村実造氏の言う、[8]

寺院が、人々の信仰ばかりでなく娯楽などの中心でもあり、人々は僧をあがめ、寺院を交歓の場としたこと

は、仏法の宣揚・信仰の普及・文化の指導伝播の他に、遼朝の目ざす仏教治国の目的、貴族や権臣らの特権階級といわず、契丹人・漢人といわず、あるいは官吏・庶民の別なく、社会上下の融和をはかる媒体として演じた役割の予想外に大きかったことが知られる。ということの一つの例であろう。

房山雲居寺の千人邑会で、遼代仏教界における千人邑会の華々しい活躍をまず窺うことが出来たと思う。更に遼代邑会の活躍・組織の実体を知るべく史料に当ってゆくが、解釈は専ら野上氏に従うこととする。

(二)　千人邑会の例

(a)　「仙露寺葬舎利佛牙石匣記」は、遼代千人邑会が記録に現われる最初のものである。しかし『遼文存』所収のものは、その全文ではないので千人邑会の存在はこれでは知れない。ただ周質の「析津日記」及び朱彝尊の「曝書亭集」に依れば、南京仙露寺に千人邑会が存在していて、天禄三年（九四九）、仏舎利を安葬するに当っては、遼帝室や貴族の寄捨の他、この千人邑会の会員である庶民に至るまでの人々の財的援助やまた労働奉仕もあったであろう。この、千人邑会の力が大きかったことが想像される。施主の姓名を記してあったと『日下旧聞』には記すが、実際に千人から成る邑会であったのかどうかは、知ることは不可能である。

（「析津日記」周質撰『日下舊聞』巻一七）

乃遼世宗天禄三年、所三瘞中藏二舎利一無レ有也。匣傍刻二僧志愿記一。具書下施二金錢一姓名上。其蓋已失レ地。名二千人邑一。故比丘尼皆稱二邑頭尼一。記後具列二大遼皇帝・皇后・東明夫人…一。

（『曝書亭集』巻五一　朱彝尊撰）

匣旁有レ記。自稱二講經律論大德志愿錄並書一。乃遼世宗天祿三年、瘞二舎利佛牙於此一。記後有二千人邑三字一。蓋社名也。施主姓名、首列二帝后諸王大臣一、下及二童男下女一。

(d)　「廣濟寺碑」によると、現在の河北省宝抵県の広済寺の太平五年（一〇二五）における同寺創建に対しての僧弘演・門弟道弘二師の献身的努力と、彼らに化導された維那琅琊王文襲らの活躍が記されている。王文襲らは、造寺に対し、労働の苦労にも拘らず参加し、彼らの努力の効あって銭万金が千室に満ちる程の状態であった。

…因率二維那琅琊王文襲等數十人一、異口同音、而請信心

不レ逆。而來共結二良緣一。將崇二勝概一、繇是労筋苦節。有二廣上人之率二羣材一、貫レ骨穿レ肌。有二弘長老之集二衆力一。…度二功量費價一、何啻於二萬緡一。糾レ邑隨レ緣。數須レ滿二於千室一。…此所謂千人之邑耶。

千人邑であろうか、と書くが、王文襄ら数十人というのは会員全体数を指すのか、それとも主要会員数でその他多数を指導したと解すべきであろうか。千人邑会と断定は出来ないのである。がしかし、同寺の完成に、邑会が結成され多大な貢献をしたことが分かる。

(e)　「石龜山遼化寺碑」は、『遼文存』の記載は極めて欠字が多い。しかし、窺われるところの大要はこうであろう。

遼化寺[9]堂宇営建事業の中心人物（恐らく僧侶）により千人邑会の結成が行われ、邑会の邑人らは、女であれば績ぎ蚕を飼い、男であれば商いし農作し、その得た資財を喜捨し、工事の遂行に寄与するところ莫大であった。

…衆越二縣俗於百里一、萃二邑社於千人一。女或績以或蚕、□以承レ筐之。□男若レ商而若レ賈、奉以二在レ橐之資一、工□レ斲以獻レ能。農輟レ耕而捨レ力。妙因二天假一、信施日增、…

(三)　特殊な性格の邑会

前掲したものは、千人邑会の名のあるものであるが、次に特殊な性格を持つ遼代の邑会について見てみよう。

(e)　「歸義寺彌陀邑特建起院碑」は『日下旧聞』に僅かに魏坤の「倚晴閣雜鈔」の引くものから窺われるのみである。それによると、帰義寺[10]には弥陀邑会があり、堂宇の造営に活躍した。この邑会の指導に当った僧侶は、恐らくここに見られる守臻[11]・智清の二人であったと思われる。会員には、劉二玄・趙徽[12]らの貴族・官吏の名が見えるが、その他一般庶民も含まれて結成されていたものと思う。弥陀邑という名称から、これが阿弥陀信仰に基づいて結成された、西方浄土往生を願う念仏邑であったことが推定される。

歸義寺、在二善果寺[13]西一。遼刹也。天王殿前一碑、無二撰書人姓名一。額題二彌陀邑特建起院碑一。文稱二寺肇自撰二清寧八年一。買二徐員外地一、遂爲二歸義寺一。備書二寺墻垣尋尺一、以及二佛像經藏之數一。碑陰首書、疏主儀悔師守司純慧大師賜紫沙門守臻、本行僧錄檢校司究精修大師賜紫沙門智清。次載二邑衆姓名一。開府儀同三司守太尉兼中書令幽國公劉二玄、開府儀同三司兼侍中開國公趙徽、建雄軍節度使開國公劉需、諫議馬子詮、尚書張挺、中舍李思口、秘書省校書郎劉文、在班殿直韓允、右班殿直王

規燕、遼國妃劉蕭氏、遼國夫人杜鄭氏、其餘邑主・邑長・正押司・官印官、副正・副錄・曆錢物名號不レ一數十人。…

守臻は、遼代燕京で活躍した高僧である。かかる高僧によって教導結成されたこの邑会は、都市的性格を持ちより高度な教化指導が行われたのであろうか。邑会の役員を務めたであろう役名が数十名分もあったということから、相当大規模な邑会であったことが判る。それも高僧守臻らの力に負うところ大であったであろう。

(g)の「斬信等造塔記」によると、この村には、螺鈸邑なる邑会があって、仏供養を行った際たまたま仏舎利を得たので、この村の念仏邑の二十余人が財施をなして舎利塔建築に携った。注目すべき点は、舎利塔建造という目的のために新たに邑会が結成されたのではなく、本来この地にあった邑会が（信仰のよりどころとすべきものを得たので）、邑人の力を結集して一つの事業に当ることになったと解せられることである。念仏邑とあるので、念仏往生を願って結成されたものであったことは明らかである。

…後、（螺鈸邑）邑長斬信等收二得舎利數顆一。自來未レ成レ辨至二第三季一。有二當村念佛邑等二十餘人一。廣備二信心一。累世層供二養諸佛一、各抽二有限之財一、同證二無爲之果一。遂乃特建二寶塔一所高千餘尺一。

(k)　またこれも同時に見たいのが「永樂村感應舎利石塔記」である。

永樂村贏鈸邑斬信等、宿懷二善種一、同奉二佛乘一。…大安六年、當村念佛邑衆張辛等、於二本村僧院一建二甎塔一坐三層高尺餘一、葬二訖舎利一。后輩螺鈸邑衆韓師巖等、欲レ繼二前風一、以垂二后善一。…

これによると、この二つの記は同じ村内の事実を示すものと考えられる。とすると、前の斬信を邑長とする螺鈸邑は、即ち贏鈸邑と同じもので、張辛らの念仏邑と合同して（ここで少くとも二つの邑会の存在が考えられる）造塔に当ったととれるのではないか。螺鈸邑について、王吉林氏は、「遼代千人邑研究[14]」で、邑会の一つとしているのだが、野上氏は殊に触れてはいない。これを邑＝村と解するよりも、〃螺〃〃鈸〃の仏教色濃い文字であることから邑会の一つとして解したい。

この後に記されているが、螺鈸邑の邑衆韓師巖等が、先の斬信が仏舎利を得たことに習ってまた仏舎利を得たので、同じ様に塔を建てたことがある。つまりこうして永楽村東禅寺は二つの仏舎利塔を持つことになったのであろうか。この螺鈸邑については、性格などよく判らない。

(h)　「京西戒壇寺陀羅尼幢并記」

崇國寺大兜率邑、邑人前管内左街僧錄淨慧大師賜紫沙門裕方、邑人前東京管内僧錄詮論大師賜紫沙門裕企、邑人提點張口恒、邑長康德從、邑證石王、邑錄邢文正、邑人陳口正、邑人康卞、邑人口從口…

この陀羅尼幢は、南京の西戒壇寺で故壇主崇祿大夫究傳菩薩戒大師のために門人有志らが建設したものであるが、故壇主とは、『金石粹篇』の王昶は明らかではないとするが、『順天府志』巻一六より法均[15]（一〇二一―一〇七五）を指すと考えられる。この経幢を建造した人々の名として、門人寺主ら十九人の名を挙げ、同時に同寺兜率邑の邑人として道俗百四十二人の名を列記している。兜率邑というのは、兜率往生を願う信仰団体が崇国寺において結成されていたことを示す。法均の門下であったと考えられる裕方と裕企は、邑人として人々の信仰上の教化に当り、邑会の事務・世話には、邑長・邑証・邑録の役員が当ったものと思われる。員数は千人ではないが、実際に邑人の名が列記されているのは興味深い。

(i)　「易州興國寺太子誕聖邑碑」は、先に考察した(1)の涿州雲居寺の灯邑が、仏誕日の祝賀行事を行っていたのと同様の目的で結成されたものであり、この名称は特にその仏誕日祝賀の目的で結成されたことを示している。これも遼代盛んに行われた仏誕日祝賀行事の、この日のために結成された邑会の様子を知るものである。銭大昕の『金石文鉞尾』には、更に碑末列銜者として都維那耶律遷以下の官吏の名を多数記していたことを述べているのは、この地の有力者が邑会を組織していたことを示すであろうが、この邑会を千人邑会と言えるかどうかは明らかでない。

（『潜研堂金石文鉞尾』巻一七「易州興國寺太子誕聖邑碑」）

右易州興國寺太子誕聖邑碑、沙門方偁撰文、范陽逸士張雲書。太子誕聖邑者、千人邑之名。以三四月八日一、誦レ經禮レ佛。而名之也。…

（『遼文存』巻四）

…斷三季於四月八日一、誦三經於七處九會一、或賫三持於繪蓋幢幡一、或備三其香花燈燭一、或歌聲讚唄。

(i)　「金山演教院千人邑記」は、典型的千人邑会の存在を知るものである。沙門善信の結成した邑会は、阿弥陀仏の名号を称念し、共に極楽往生を願う念仏邑である。恐らく、韓温教が邑長として世話役に立っていた。

…復有三沙門善信一。…遂結三千人之友一。爲三念佛邑一。每會稱三念阿彌陀佛名號一。庶盡三此報一、同生三極樂世界一。是其願也。　會欲レ成、　卿人韓溫教嘉三其事一、遂述三其本

末。…

以上は、金石文中に見られる主な遼代の邑会である。他に『遼文存』には邑会の存在を想像させるものとして、巻五の「祐唐寺覩建講堂碑」〔李仲宣撰統和五年（九八七）〕に「其邑人姓氏具列碑陰」の記述があり、巻六には「涿州超化寺誦法慈修建實錄碑」〔劉師民撰清寧二年（一〇五六）〕の「邑人文正三十餘衆」の字が見える。本文は判らないが、遼金石存目の項に「崔邑衆造陀羅尼經幢」〔重熙二十一年（一〇五二）〕と、「邑人志該等造陀羅尼經幢」〔乾統元年（一一〇一）〕が、邑会の存在を窺わせる。しかし、何れも明らかに存在を証拠づけることは出来ない。とにかく、これら以外にも記録に残らなかった多くの邑会の存在が考えられるのであり、遼代、仏教が社会の上下なく広く浸潤するのに邑会の果した役割の大きかったことが判るのである。

第二節　遼代千人邑会とは

(一)

これまで、遼代における邑会について、史料に基づく考察をして来たが、以上のことから凡そ次の様に言えるであろう。

遼代、仏教は皇室の崇仏政策を受けて空前の盛況を呈し、また民間に多数の邑会が結成され、これが更に仏教を社会に普及させるのに多大な貢献をした。しかしその邑会の殆どが遼本土でなく中国内地のいわゆる燕雲十六州のみに存在していた。邑会は仏教信仰を紐帯として結成され、しばしば様々な仏教的事業を遂行した。また特定の事業を遂行するため新たに結成されることもあり、特定の信仰性格を有する、例えば念仏邑・兜率邑・太子誕生邑の様なものもあった。普通、邑会はある寺院に属し、会員の精神的指導にはこの寺院の僧が当る。一方、邑人（会員）は一定の財施の義務があった。邑会の経営などの事務・世話に当ったのが一般会員中から選ばれた都維那・維那・邑長・邑録・邑証などの役員である。邑人は道俗男女を問わなかったし、邑会は都市・農村、あらゆる階層・職業の人々の間に広く結成されたであろう。員数は、個々の場合で異なっていたであろう。結成後の新たな希望者の加入、死亡などによる減少とかを考えても出入は絶えずあったに違いない。

ところで、遼代邑会の特徴は、この員数を千人と限定した千人邑会が出現したことである。この千人邑会の名

は、六朝隋唐代には認められない。実際千人邑と言っても常に千人を擁していた訳でなく、それ以上以下の場合が考えられるのであるが、とにかく千人というのが会員の基本数となっていたと考えられる。邑人の数を限定しないものが、遼代邑会の大多数であり、ただ千人邑会は典型的模範的なものとして存在したと考えるべきである。

千人邑会を遼代仏教の典型として見る場合、その名称の始まりをいつに求めるかということについて銭大昕は、『金石文跋尾』巻十の中で、五代後唐の明宗天成四年(九二九・遼太宗天顕四年)の「重修定菅禪寺千佛邑碑」を挙げ、これ以前の碑文には見られず、これが名称の現われる最初としている。[15]

遼代に見られる邑会の性質について更に始源を溯れば、これは南北朝以来の邑会・義邑などと同じ性格のものであろう。五代においても普通の邑会・義邑の存在は認められるのであるが、後周世宗の廃仏によりこれらの邑会は一掃されてしまったと考えられる。(第二章を参照)

(二)

以上は、主に野上氏の意見に従うところであり、他、塚本氏などの意見を参考に、若干の私見を挿むものであったが、更に他の論文より参照とすべき点を挙げてみたい。

まず、王氏は前掲論文の中で「千人邑は当時社会上の一種の非正式団体であった」と述べる。千人邑の種類について念仏邑・螺鈸邑・灯邑を挙げるが、螺鈸邑については、(j)または(l)の史料研究の中で触れたとおりである。氏は、大多数の千人邑は恐らく千人に足らなかっただろうが、千が理想的数字であり、千人邑と呼ばれたと言う。しかしここに挙げられる永楽村の螺鈸邑は千人邑と断定出来ないし、その同じ村にあった念仏邑の邑人二十数名という事実から、恐らく千には遙か及ばない員数と想像され、これを千人邑の中に加えるのは難があろう。この論文が簡単なものであるのは残念である。が、邑会が非正式団体であったというのは事実である。邑会は民間に自然発生的に結成されたものである。しかし、この千人邑会を始めとする邑会の存在は、支配者たる遼朝にとって決して厭うべきものではなかったはずである。なぜなら、国家仏教の方針を採る遼朝が仏教を社会に普及させる上に、この庶民の間に自主的に結成された邑会は最適の役割を果すものに他ならなかったからである。邑会は、仏教の宣揚・信仰の普及・文化の指導・伝播の役割を果

し、ひいては社会上下の融和を図る媒体としての役割を社会の末端で果していたのである。

神尾弐春氏の『契丹佛教文化史考』[17]に、「世宗聖宗代の明帝賢臣の適時に（寺院に対して）補助を与え指導を試みた事は満蒙内地の都邑において契丹人と混住していた漢人に安んじて千人邑の結成をなさしめた。」とある記述は正に的を得ているであろう。遼代の邑会の盛況ぶりは、遼朝の崇仏政策をそのまま反映するものであり、非正式団体ではあったが、その性格は国家の意図する方針と何ら反するところないものであった。

第二章　邑会の歴史

第一章で遼代の邑会について考察をして来た。ところが遼代邑会の研究を推し進める上でその性格を明確に摑むには、どうしてもその系譜を知る必要と、発生を確める必要があろう。前代後代の邑会を調べることで、遼代邑会の姿がよりあざやかになることと思い第二章として取りあげるものである。

第一節　邑会の始源

隋唐代の邑会・義邑については山崎宏・那波利貞両氏により精緻な研究が行われており[18]、ここでは主に両者の研究を基に邑会とは何かについて考察する（南北朝、特に北魏の邑会については塚本氏の『北朝仏教史研究』[19]の中に大いに参考すべきものが見られる）。

(一)　義邑・邑会

邑会・義邑と呼ばれるものは南北朝五世紀頃から華北に作られた在俗の仏教団体の事であり、当時は造像を中心として結ばれた一つの信仰団体であった。始まりは南北朝の北魏に求められる。つまり金石文中に最初に見られるのが北魏太和七年の造像銘[20]に記載された邑義である。龍門古陽洞造像銘に邑主中散大夫滎陽太守孫道務乃至維那程道起等百二十九名の名が見られる（高雄義堅氏「北魏に於ける佛教教團の發達に就て[21]」）。その起源を大村西崖氏[22]や高雄氏は曇曜の僧祇戸・浮図戸に求めている[23]が、僧祇戸や浮図戸はその性格上経済的能力・出家の経済的要求から生れたものであり直接的に義邑に結びつくとは考えられない。だが、僧祇戸が最も在家仏教信仰団体として結成され易い条件に置かれていたとは考えうる[24]。当時、中国の仏教は北魏の頃から一面には国家と対立す

る統制機関を備え大教団的形式に進出すると共に、他面経済的組織を確立し宗教的情熱と相俟ちて内部的に発展の素地を養う機運へと向って来ていた。北魏の歴代崇仏政策を受け次々と仏教大事業が行われ、その主なものが雲崗などの石窟寺院建築である。義邑はこの様な気運のうちに発生した。義邑は仏像・窟院などを造営しその維持発展に努め、更に斎会や写経誦経印沙仏などの信仰的行事を行い、特に造像・設斎などの時には組合員がそれぞれ金品を醵出したのである。[29] 邑義とは邑の法義、邑人とは邑義の人、義邑とはその団体を指す。

隋代は造像熱は尚盛んであった。[30] 遼代の典型的千人邑を生んだ雲居寺の石経刻造が僧静琬により始められたのがこの時期である。山崎・塚本両氏によればこの頃作られた偽経「提謂経」が義邑の発生に重大な影響を与えた。[31]

初唐の頃から巨大な造像は減少し、次に経幢作製の風が起こり、漸次造像に代り流行した事は団体の力を借る必要がなくなり、自然像造銘に義邑の名は少なくなって行った。が、その行事に多少変化があり、またそのままの名称で呼ばれなかったにしろ永く唐末五代の頃まで存続していた。造像を重視する必要がなくなった結果、義邑の行事の他の一半であった斎会誦経が重視される様になった。[32] 中晩唐以後、文献上金石文中に義邑の名は現われないが、社・社邑などと変称され、その実は尚連綿として伝えられて行った。

義邑についてまとめてみると、その性格は、主に在家が恩師の法施を受けて先づその団体の基礎をほぼ形成した上、各自の協同出資によりその信仰対象となるべき仏像を造りそれにより相互に宗教的情誼を深め、平素は一定の読誦その他を行い定期集会には斎を設け、当然講経を伴ったと思われる。特殊の誦経等を行い、共同の目的に従って団体の強化向上を図った。構成員の主なものは、邑主・邑長・邑維那＝邑子を統制しその団体の事務を執る、化主＝財物募集に当る、施主・檀越主・斎主＝財施者の重要人物、塔主・像主ら＝出資者、などがあった。また邑会で重要な役割を果したのが邑師と呼ばれる教化僧であり、会員の精神生活の指導に当り、法施の任に当った。彼らは兼任性・遊化性を有していた。[33] 義邑では斎会は重要で斎主等の名が見える。信仰祈願の対象は弥勒・釈迦・弥陀・観音が主であり、現世及び来世の利益を祈願した。

(二)　邑　社

中晩唐・五代の義邑・邑会系統のものに関する史料は従来少ないが、敦煌文書には相当豊富である。[30] 従来の義邑の名称は変化し、社邑或は単に社とも呼称され邑員の名称も変化したが、その実は等しかった。那波氏によると、その中晩唐時代の社邑には三種類がある。

即ち、①南北朝以来の義邑・邑会の系統。しかし造像事業に専らでなく、むしろ斎会誦経写経俗講支援等に専心。②①から派生したが全く仏教信仰を重視せず、むしろ努めて信仰より遊離した社邑。寺院に属さず郷里坊巷で町内組合同志社交機関、相互扶助組合として独立的に存在。③①と②の混合。春秋祭社の習俗、斎会誦経俗講援助の事業、団員の修養、相互扶助をなすもの。

①と③は淵源は古の義邑・邑会に発し、多少その内容の変化したものに過ぎず共に仏教信仰中心主義のもの。②は、利欲を離れた仏教信仰から、信仰を度外視し庶民親睦社交組合、共存共栄自治提携主義に傾いたもの。①から②へと変化して行った。この種の社邑を派生したことは、世間的物質主義へと変転しつつある世風の傾向の存在を暗示しており、事実、宋代に入ると益々盛んになって行った。

(三) 法社

義邑に比較すべきものとして法社の問題がある。山崎論文により法社について少しく考察する。法社の始まりは南北朝時代の廬山慧遠の白蓮社（四〇二）であり、六朝隋唐の間にも相当存在し、唐末～宋代にかけて殊に盛んになった。主に江南に見られ、厳格な戒律主義を課し、在家は貴族大官であった。法社が社誡を重視したのは、在家出家合同の信仰団体を統摂するために法社は組織されていたからである。

義邑は隋唐を通じ華北に存在し、江南には殆どない。法社は本来的なものは江南であるが、唐代には華北にも拡がっていた。両者は、高宗・則天武后の頃から内容的にも地域的にも歩み寄って混淆する傾向を生じ、中唐以後に往々見られる神皓の西方結社[31]や神湊の菩提香火社[32]の如き高級法社を除くと、殆んど義邑と法社の区別は困難となり、名称も紛しく、性格は変化錯雑していた。[33・34]

(四)

以上遼代邑会の始源を求め、義邑・社邑・法社につい

て主に山崎・那波両氏の意見に従って考察して来た。これらについて詳しい研究が必要であろうが、それはこの論文の主目的ではないので、まず一応諸氏の意見をまとめるに留める。ではこれらと遼代の邑会との関係を考えてみたい。

金石文などから五代にも普通の邑会、義邑の存在は認められる。しかし後周世宗の廃仏（九五五）[⑩]はそれらを一掃してしまったであろうことは想像に余りある。一方、燕雲十六州の地においては、当時契丹治下にあった事から却って廃仏を逃れた。この時期、涿州雲居寺においては寺主謙諷により千人邑会が結成されている事実があるのである。この千人邑会は寺主・幽州涿州の有力者と官民合同で結成されていた。第一章で見た様に、千人邑会を代表とする遼代の邑会は一般に庶民層の間に結成されていた事、また盛んに行われた仏寺仏塔の造営その維持を目的とする経済的基盤であった事などから、南北朝隋代における義邑・邑会の性格と似ている。また、南北朝時代にはその員数が千人・二千人に及ぶものがあった事が判っている（『金石續編』巻二「凝禪寺三級浮圖碑」元象二年）[⑪]。北魏を中心とする北朝では、漸く仏教が大教団化して来るのに合わせて、仏教事業の気運が非常に盛り上った時代であった。それは数百年経った遼朝下でも同じく仏教中興の気運が盛り上っていた。そして同様に国家による厚い仏教保護の手が伸べられていた。どちらも熱烈に仏教が受容された時代であったと言える。これには北朝・遼朝ともに異民族王朝であった事は重視される。大事業を遂行するためには五百人・千人・二千人の大義邑・大邑会による強力な経済的援助は是非とも必要であったろう。しかしこの様な大団体ともなると当然組合員の相互関係が弱くなるはずであり、それを維持するためには指導者たる僧侶や役員の能力が問われるであろう。が反面、当時の具体的には造像熱を始めとする形で表われる一般の崇仏心の高かった事が結成を可能にしたと言えるであろう。ただ南北朝時代は仏教自体がまだ教団の発展期であり、邑会は仏教そのものを社会に広めるという目的もあったが、遼代は完成された唐代仏教をそのまま継承しただけ、念仏邑などの信仰を主な目的として結成されたものが多数存在した事からも、かなり信仰教化面が充実していたものと思われる。遼代邑会が中晩唐五代からの継承を考えるなら、南北朝隋代の義邑の系統を受継いで行った社邑の①の性格を有する面が大いにある。しかし、法社の影響については、本来的意味の法社は遼朝には見られず、むしろ宋朝において発展して行った。

第二節　遼代以後の邑会

遼代の邑会の形態はそのまま次代の金へ受継がれて行った。相変らず邑会が盛んに結成されていた事が金石文から知られる。金代の邑会は、「興中府尹銀青改建三學寺及供給道粮千人邑碑」や「宜州廳峪復建藏經千人邑記」に典型的千人邑会の様子が知られる。

(m)〔「興中府尹銀青改建三學寺及供給道粮千人邑記」『滿州金石志』巻三、大定七年（一一六七）〕

是以大尹銀青愈加修造之意。遂感士庶竭力、助緣滿寺。殿舍不日告成。大尹曰、成則成矣。慮吾改任三師學人有闕日用、其將奈何。嘗糾千人邑。不問僧尼道流男女老幼、每歲十月一日、人各納錢二百米一斗、永給道粮、…

(n)〔「宜州廳峪復建藏經千人邑記」『同』外篇　皇統八年（一一四八）〕

至於皇統六年十月七日、無何爲火災所焚、其餘屋舍掃地皆盡。…郡人馬祐者乃逸士也。遯世高蹈、卜居相隣。自觀煨燼之餘基、誓發繼興之大願。遂與舊邑人顏壽等、親爲倡率、轉相糾合、乃得千人立爲一社。衆推馬祐爲邑長、以顏壽爲提點。募錢易經、鳩工構藏、隨其卷帙、貯以櫃匣、其餘佛屋僧廊、次第建立。

(m)は、三学寺の経・律・論の三学僧師の生活を維持するために、興中府尹の銀青によって千人邑会が組織され、僧尼官民の男女老女となく毎年十月一日をもって各々銭二百文、米一斗を納めさせたことを記す。実際の財施の数値を記す例である。(n)は、馬祐が発起して邑人千人を得て千人邑会を作り、その邑会の活躍で先に焼失した経を蔵に納め、かつ仏殿僧坊をも再建したことを述べている。

その他「維大金國義州開義縣淨勝寺誌鐘之碑」〔『滿州金石志』外篇、泰和元年（一二〇一）〕にも千人邑会の様子を載せる。またこれらの他に金石文中から龍花邑（「大金澤州陵川縣古賢谷禪林院重修彌勒殿記」『金石粹篇』巻一九）、華厳邑（「石州定胡縣上招賢村普照禪院記」）、薄伽邑（「大金國西京大華嚴寺重修薄伽藏敎記」）などの邑会の存在を知ることが出来る。これらから金代の仏教が遼代仏教をかなり受継ぐ性格であったことが分る。これは、遼を滅ぼし同じく中国征服王朝となった金朝が、その崇仏方針を受けて仏教保護を行ったためであり、この時代も千人邑会を始めとする邑会が尚盛況であったのは、遼・金代を仏教文化史的に見て同一系統のものと見

てほぼさしつかえないであろう。また被支配層漢人の中心となった中国的仏教が盛んであったことは、両代は彼ら漢人にとって同じ性格の社会であったとも言える。

元代以後においては、千人邑会はおろか邑会の存在は殆ど認められていない。

結　論

以上、遼代の邑会（特に千人邑会）について考察し、また邑会の歴史の中に遼代を位置づけるために、その始源を溯り、南北朝・隋唐・五代の義邑・社邑・法社についても考察し、最後に金代の例を見てきた。その結果をまとめると次の様に言えるであろう。

征服王朝である遼朝は、被支配者である漢人を宣撫し人心を取攬するために、仏教を文化政策に採り入れ、手厚い保護を加えた。その結果、国家仏教の政策は多大な効果を現わし、仏教は大いに盛え、仏法の宣揚・信仰の普及・文化の指導伝播ばかりでなく、契丹人と漢人、社会上下の融和を図る媒体としての役割を果したのである。この時代の邑会の活躍は、特にこれが庶民の間に結ばれた純然たる信仰団体であるだけに注目される。遼代の邑会で特徴的なのは、千人邑会の存在であり、五代に始まり金代にも盛んに結成された。千人邑会の如く多人数の邑会が結成されたのは、遼代、盛んに行われた仏寺仏塔の造営とその維持の経済的援助を与えるためであり、石経山雲居寺重修における千人邑会の活躍は、この大事業を遂行する原動力であったことが知られている。

この遼代に結成された邑会と同様の性格を持つのが南北朝時代の義邑である。異民族国家にあって、文化政策に仏教を採用し大いに仏教文化に盛況を呈した北魏が、義邑の発生期と考えられる。当時は皇室貴族高官のみならず、一般庶民にまで仏寺仏像の造立が広まっていた。盛んに仏教大事業が行われた北魏から隋代において、義邑は目的とする所、その事業の経済的支援にあった。北朝時代にも五百、千、二千という員数を有する大邑会・義邑が結成された事は、遼代の千人邑会の成立要因と同じであろう。ただ遼代においては、南北朝の頃より更に人々の仏教信仰が深く浸透していたものと思われる。これは、遼代の仏教が盛唐仏教を受継いだ、征服王朝下の中国仏教であったことに因るであろう。唐代に入り義邑は、その性格を変え娯楽性を専らとする社邑となってゆくが、遼代の邑会はむしろ斎会などに専心して行った信仰中心の方向のものの性格を受継ぐと言える。つまり、遼代の仏教信仰は、少なからず支配者である異民族たる

契丹人の性格（素朴とか）を受け、純粋な意味で人々は仏教に陶酔して行ったと思われるし、邑会の性格もこの性格を有していたと思われる。遼代における仏教が、宋朝より一時代遅れたものであったが、それだけにまた仏教が人々の間に理解され、民衆化されたのではあるまいか。それは南北朝代の北朝でも同様と言える。とにかく、この遼代邑会の把い手は、被征服民である漢人のしかも一般庶民であったが、人々は寺院におけるこの邑会を紐帯として互いに信仰を深め、交歓を結び生業に励み、生活に安んじたのだった。

千人邑会を始めとする遼代の邑会は、金代にそのまま受継がれて行った。これは金朝が同様に、仏教保護政策を採用した事による。

千人邑会の盛況ぶりは、その担い手が一般庶民層であった事からも、遼代には仏教が如何に社会に浸潤していたかを明確に示すであろう。こうして邑会を通して寺院と庶民とが信仰上からも結ばれていたことはまた、仏法が人々に果した社会的教化の意味も大であったと考えられる。邑会は遼朝の崇仏主義を反映し、民間に自主的に結成されたものであった。しかしこの遼代邑会は、国家の仏教採用の政策の意図として期待された世界宗教たる仏教の精神（あらゆる民族の融合）を実現した末端の組織の役割を果すものであったとも言えるのではなかろうか。二百年間に亘る遼朝の存続と仏教政策の採用、特に民間の邑会の盛況は大いに関係づけられるものである。

注

① 特に仏教が採用されたのは、中国本来の儒教・道教は中華と夷狄の優劣を説く中華思想が付随する漢人の民族的思想であり、異民族王朝の遼には受入れられないものであったこともある（「夷夏論」と言う）。

② 「遼代の邑會について」（昭和十四年二月『大谷學報』二十巻一号）

③ 諱は崇昱、俗姓は李氏、安次県の人。『遼文存』巻六「□□上人墳塔記」〔天慶十年（一一二〇）〕の□□上人と思われる。

④ 維那または都維那。梵名 Karma-dāna の音写は羯磨陀那で授事の意。僧衆の雑事を司り、またそれを指授する者であるが、邑会においても事務をとる者をそう呼んだのであろう。

⑤ 『遼史』巻七六「趙延壽傳」がある。

⑥ 一〇〇四年

⑦ 「房山雲居寺の石刻大蔵経」『中国近世仏教史の諸問題』第二部第十「遼代の石刻続刻事業」参照

⑧ 『中国征服王朝の研究』上、第六章「遼朝の社會に關する研究」第三節遼代佛教の社會史的考察三六七頁参照

⑨ 河北省涞水県にあった。

⑩ 唐天宝年間（七四二～七五五）に燕京に創設。

⑪ 道宗代活躍。『釋摩訶衍論通贊疏』十巻、『科』三巻を著す。

⑫ 『遼史』巻九七「趙徽傳」

⑬ 五代に始まる。（『順天府志』巻一六）

⑭ 「遼代千人邑研究」『大陸雑誌』三五―五　昭和四十二年

⑮ 『補續高僧傳』巻一七「法均傳」太康元年寂。俗姓・出身地は明らかでない。

⑯ 右磁州武安縣定晉山重修古定晉禪院千佛邑碑。天成四年九月九日建。…千佛邑者、合二千人一出レ錢、布施之名。亦曰二千人邑一。此碑稱二邑首都維那三人次維那十人一。共稱二良圖一。互相勉導。逐處二鄉邑一。次立二維那一。擧二其萬法之門一、結二會千人之數一。當時剏二立邑會一。其制大略可レ見。遼金之世、諸寺各立二千人邑一、見二於碑刻者一、未レ易レ更。…乃知レ濫二觴于五代一也。

⑰ 『契丹佛教文化史考』昭和十二年「契丹の寺院」六「契丹寺院の經濟」参照

⑱ 山崎氏によっては、『支那中世仏教の展開』、「唐代の義邑・法社と俗講に就いて」『史学雑誌』（昭和十三年）四七編七号、「隋唐時代に於ける義邑及び法社に就て」『史潮』三巻二号（昭和八年）

那波氏によっては、「唐代の社邑に就きて」『史林』二三巻二～四号、「佛教信仰に基きて組織せられたる中晩唐五代時代の社邑に就きて」『同』二四巻三、四号、の一連の論文がこの問題を追求している。

⑲ 『塚本善隆著作集』第二巻

⑳ 「新城県功曹孫秋生等二百人造像記」

大代太和七年。新城県功曹孫秋生、新城県功曹劉起祖。二百人等、敬二造石像一区一。願國祚永隆、三宝弥顯…維那程道起、孫竜保、（以下列名）

景明三年歳在壬午五月戊子朔廿七日造訖。

比丘慧成、若しくはその協力者は古陽洞の造窟事業を発願し遂行するに当って、新城県功曹等の造像組合が、太和七年以来積み立てて来た造像基金を、彼の事業へ寄附せしめ、その造像に当てた、と塚本氏は解す（『北朝仏教史研究』第七「竜門石窟に現れたる北魏仏教」三四八頁）。つまり、太和七年は邑会の結成年と見るわけであり、氏の意見に私は従いたい。

㉑ 『龍谷大學論叢』二九七

㉒ 『支那美術史彫塑編』

㉓ 『魏書』巻一一四、「釋老志」

曇曜奏、平齊戸及諸民、有下能歳輸二穀六十斛一入二僧曹一者上、卽爲二僧祇戸一。粟爲二僧歳一、賑二給飢民一。又請下民犯二重罪一及官奴上、以爲二佛圖戸一、以供二諸寺掃洒一。歳兼二營田一輸レ粟。高宗並許レ之。於レ是僧祇戸粟及寺戸、徧二於州鎮一矣。

㉔ これについて塚本氏は前掲著作の第四「北魏の僧祇戸、仏図戸」の中で「かかる制度は当時の北中国の実状に適応し、国家の政策に順応したものであった」と述べる。つまり、久しい動乱の後の人口稀薄、土地荒廃の最も甚しかった北中國を統治する北魏の国策の緊急要事は、諸民の土着による人口の充実と農業生産の復興・労働力を総動員して土地の生産力をできるだけ利用し、もって国富を充実し国

民生活を安定することであり、当時徙民政策もこの目的で行なわれていた事実は、遼代初期の仏教政策導入の意図と等しい。そして氏は、「この僧祇戸・仏図戸を邑義邑社等の信仰を紐帯とする団体の発達との連関の上に考えてもよかろう」と述べる。山崎氏も同様である。

㉕ 盛んに邑会が造営事業を行っていた事は、例えば龍門石窟の記を当ると

「邑主馬振拝等卅四人造像記」景明四年（五〇三）、「邑師道暈等造彌勒像記」永平二年（五〇九）、「邑主孫念堂等造像記」神亀二年（五一九）、「像主薛胡仁合邑十九人等造釈迦像記」正光六年（五二五）などの邑会の存在が知れる（『龍門石窟の研究』水野清一・長廣敏雄両氏（昭和十六年）及び塚本氏前掲著書）。

㉖ 隋代義邑の例として挙げておく。

「張洪亮等造像記」開皇十五年（五九五）『金石文跋尾』巻三

…維那張洪亮等、敬造二□光像一軀二菩薩一、上爲二皇帝陛下州縣令長一又爲二七世父母援及一切衆生一、咸同斯福後列維那孟清等十人…

㉗ 山崎氏『支那中世仏教の展開』第三部「佛徒の社會的活動の展開」第四章の(二)、塚本氏『同』第六「中国の在家仏教特に庶民仏教の一経典」を参照。

㉘ 「益州福壽寺釋寶瓊傳」『續高僧傳』巻二八を例に挙げる。

…晚移二州治一、住二福壽寺一。率二勵坊郭一、邑義爲レ先。毎レ結二一邑一、必三十人。合二誦大品一、人別一卷。月營二齋集一、各依レ次誦。如レ此義邑、乃盈二千計一。四遠聞者、皆來造欵。

㉙ 邑師の兼任性・遊行性を示す例を挙げる。「法通傳」（『續高僧傳』巻二四）

多置二邑義一。月別建レ齋。但有二沙門一、皆延二村邑一、或有レ住レ宿。明且解レ齋。家別一槃、以爲二通供一。此儀不レ絶、至レ今流行。河石諸州、聞レ風服レ義。

㉚ 那波氏は、前掲論文の中で、スタイン氏将来大英博物館蔵のものとフランスの敦煌文書を渉猟され実際に多くの史料を挙げているので参照されたい。ここにその内の一つを引用する。

（佛國第三二二〇號紙背文書）

天立二義社一。以二忠孝一爲レ先。六量和會。然可レ書レ條。君子先思而後易。小人先易後難(難)。決定之言。誰聽百行訓。古人有二三州父子一。五郡兄弟。長幼已有二薦流尊卑一。順二之範軌一。龍沙右(古)制。則有二社邑之名一。邊地土壹(豊)。鄉閭最切追逐(逐)□□(吉)。自有二常規一。輕重科承從來舊典。今已品蔭。悉是高門君子、爲結二交情一。剏二新社則一。乃具條二分明一、義質二禮儀一。長幼有レ差。仍犯二二條一。賓主掌二書行一。

㉛ 呉郡包山の神皓。律師越州の曇一に学ぶ。開元寺に住していた。「西方結社」については『宋高僧傳』巻一五等に至って簡単に述べるだけである。

㉜ 江州興果寺の神湊。白楽天と親しかった。『白氏文集』巻二四「唐江州興果寺律大德溪公碣銘」に

本結二菩提香火社一。共嫌二煩惱電泡身一。不レ須二戀戀從レ師去一、

先請西方作ニ主人。

㉝ 貴族的なものとは言えないが、法社の例を挙げておく。法社の信仰重視の面が知れるであろう。

「華厳社石記」（『白氏文集』巻五九）

有ニ杭州龍興僧南操一。當ニ長慶二年（八二二）一、請ニ靈隠寺僧道峯一、講ニ大方廣佛華厳經一。至ニ華厳世界品一、聞ニ廣博淨事一。操歡喜發願、願ニ於白黒衆中一、勸ニ十萬人一。人轉ニ華厳經一部一、十萬人又勸ニ千萬人一。人諷ニ華厳經一卷一。毎歳四季月、其衆大聚會。於レ是攝レ之以レ社。齋之以レ齋。自ニ二年夏一、至ニ今年秋一、凡十有四齋。毎齋操捧レ香、跪啓ニ於佛日一、願ニ我來世生ニ華厳世大香水海上寶蓮金輪中毗盧遮那如來前一。與ニ十萬人一、俱斯足矣。又於ニ衆中一、募レ財置ニ良田十頃一、歳取ニ其利一、永給ニ齋用一。予（白居易）前牧杭州時、聞ニ操發ニ是願一。今牧蘇州時、見ニ操成ニ是功一。操自抗ニ諸蘇一凡三請ニ於予一曰、操八十一矣。朝夕待盡。恐社興レ齋、來者不レ能レ繼レ志。乞爲レ記、誡。俾レ無ニ廢墮一。予則十萬人中一人也。宜ニ手レ志而贊ニ之。

㉞ 法社について詳しく述べる必要はないと思うが、義邑と法社を参考までに対比させると次の様である。

義邑	法社
①初め仏像その他堂塔結局は偶像的なものに対する信仰を一にする所から、その造営を機縁として育成された。	①相当の義解の下にその祈願達成のため所定の所を修めんとする所に同志の結成を見た。
②構成員は一般に庶民在家。大多数直接生産業に従事する者→仏教的教義において一段高い邑師の法施・指導が必要。	②本来貴族大官有閑階級の在家と若干の出家→専門的教化師は特に必要ではない。
③現世利益的願望を持つ。	③戒律主義が濃厚。
④血縁ないし地縁的制約。団結の要素にしばしば不純がある。	④比較的自由。純粋な宗教心。
⑤成立時期は五胡紛乱の後統一した北魏初期。	⑤比較的平和な、国家的理想を失い著しく遁世的になった南方東晋。
⑥現実国家に対する喜び、国主の長久を祈願する気持がある→世間的なものとの協調を許す。	⑥王権の存在に殆ど無関心→一定の節度・社誡と相容れぬ者は受容しない。

㉟ 顕徳二年（遼穆宗応暦五年）

㊱ 五三九年

参考文献一覧

○遼代の邑会について

「遼代の邑会について」（『遼金の佛教』野上俊静　平楽寺書店　一九五三年）

「遼代千人邑研究」（『大陸雑誌』三五―五　王吉林　一九六七年）

○石経山雲居寺の研究について

「房山雲居寺の石刻大蔵経」（『中国近世仏教史の諸問題』『塚本善隆著作集』第五巻　塚本善隆　大東出版社　一九七五年）

○遼以前の邑会の研究に参考になるもの

『北朝仏教史研究』（『塚本善隆著作集』第二巻　一九七四年）

「北魏に於ける佛教教團発達に就て」（『龍谷大學論叢』二九二　高雄義堅）

『支那中世仏教の展開』（山崎宏）

「唐代の義邑・法社と俗講に就いて」（『史学雑誌』四九―七　山崎宏　一九三八年）

「隋唐代に於ける義邑及び法社に就て」（『史潮』三―二　山崎宏　一九三三年）

「唐代の社邑に就きて」（『史林』二三巻二～四　那波利貞　一九三八年）

「佛教信仰に基きて組織せられたる中晩唐五代時代の社邑に就きて」（『同』二四巻　那波利貞　一九三九年）

○遼代の仏教について

『遼金の佛教』（前掲）の遼代篇

「契丹佛教発展考」（『大陸雑誌』第十八巻　第四期　韓道誠　一九五九年）

「遼の佛教」（『史潮』二―二　常盤大定　一九三二年）

『契丹佛教文化史考』（神尾弐春　満洲文化協會　一九三七年）

○遼代の研究（政治・制度）

『中國征服王朝の研究』上（田村實造　東洋史研究会　一九六四年）

○通史・概説として

「内陸アジア世界の展開Ⅰ　総説」（『岩波講座世界歴史』9　護雅夫　岩波書店　一九七一年）

『征服王朝の時代』（『新書東洋史・現代新書』③　竺沙雅章講談社　一九七七年）

『仏教史概説』中国篇（野上俊静ら　平楽寺書店　一九七六年）

〔付記〕本稿は昭和五五年度に提出した卒業論文である。